News Letter　2009.12.10　第 25 号

たちばな
京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

シンポジウム「研究者になる！」

日時　　平成２１年 11 月６日　　16：00 から 18：00
場所　　京都大学吉田南総合館東棟共東 41 講義室

たくさんの方に研究者になる道を見ていただこうと、キャリアサポートセンター、女性研究者養成システム改革推進委員会との共催で、シンポジウム「研究者になる！」を開催しました。司会は、村山留美子・女性研究者支援センター広報事業 WG 主査です。

はじめに、新地 博・研究推進部研究推進課長より「さまざまな若手研究者育成支援制度について」の紹介がありました。研究を進めていくには研究費の確保が必要です。京都大学独自の若手研究者支援としては、（1）スタートアップ研究費（2）ステップアップ研究費の 2 つのカテゴリがあること、また、「白眉プロジェクト」と呼ばれる次世代研究者育成支援事業による年俸制の特定教員採用についても説明がありました。

その他、平成 18 年から 20 年度の 3 年間にわたる科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル育成事業」の推進を、今年度からは「京都大学重点事業アクションプラン 2006 ～ 2009」のなかで、継続的に着実に実施していくこと、さらに、新たに「女性研究者養成システム改革加速事業」に採択され、事業を推進していることの説明がありました。

続いて、浅利　美鈴・京都大学環境保全センター助教より「大学だからこそなれる『ごみ研究者』」の講演がありました。先生のごみとの出会いは、大学 4 回生の時だったそうです。携帯電話のレアメタルなど、有害なものに着目をして研究を始め、修士課程では、住宅解体時の手法のマニュアルづくりなどをされました。

講演は、われわれの身近なものを題材に、「日本人は 1 日に一人何グラムのごみを出すでしょうか？」などクイズを取り入れて、ごみへの関心を向けたあと、高度経済成長期以降急激にごみの排出量が増えたこと、10 年から 20 年で様々な金属資源が枯渇することなどをデータでお示しいただきました。ごみ調査の現場のスライド、特にハードワークな生ごみ調査の状況なども見せていただきました。それらから、3R（リデュース・リユース・リサイクルの順番で考える）で循環型社会を目指す必要性を説かれました。

現在は、ごみ研究者としてその道をまい進されている先生ですが、始めから研究者になろうと思っていなかったそうです。でも、環境問題に関心を持ち、活動していく中で、もっと多くの方に関心を持ってもらいたいと思い始め、研究者の道に進まれました。ごみ研究者というのは、いまの大量生産・大量消費に対して、逆行しようとする役割なので、経済に反してやらなければいけないことが多いわけで、やっぱり営利目的としない大学だからこそなれると考えておられます。一方で、いろいろなところで迎合せずに、大学ならではのごみ研究者になりたいとも考えておられます。その思いが今日のタイトルに込められているそうです。

次に、松下祥子・日本大学文理学部物理生命システム科学科准教授より「新米ママ、実験系研究室を運営する」の講演がありました。

先生は、科学者になりたいという思いを持って、応用化学科を選択され、修士、博士課程を修了されました。理化学研究所で 3 年間、研究員（ポスドク）を、続いてプロジェクトの副チームリーダーを経験され、日本大学に移ってご自分の研究室を持たれました。念願かない、科学者になれて、楽しかったと言い切る先生は、とてもパワフルです。男性には、ちょっと居心地が悪いかも・・・とお気づかい下さいながらも、自称「わがまま」とおっしゃる先生は、室長（PA）になってから子どもを産もうと決心されたそうです。子どもを産むことに理解のある上司につけるかは不確実ですが、優秀ならトップになれるのだから、自分が頑張ってトップになろう！、35 歳までに出産しようと計画を立てられ、見事実行されました。

2007 年 6 月に妊娠が発覚、ここまでは計画通りでしたが、なかなかその後は計画通りには行きません。すぐに切迫流産の危機に直面し、救急車で病院に運ばれました。1 か月入院し、自宅療養に移ったあとも、とにかく「安静」が必要で、椅子に座る事さえままならない状況の中、研究室運営、学会発表をこなされました。これを「私は倒れていただけ。すごかったのは周囲。研究室のみんな、同僚、事務局の方々」と言い切る先生です。2 月に出産し、2 か月後に、子どもを保育園に預けて職場に復帰した後のことも、「とにかく周囲の人の温かさに救われて、やってこれた。私はラッキー」とおっしゃいます。

しかし、職場復帰時、（1）常に睡眠不足で体力がきつい（2）こんなに犠牲を払ってまでする価値のある仕事なのかと自問自答する日々（3）大学にいられる時間がとにかく短いことを挙げ、精神的に大変だった という生の声を聞かせてくださいました。もしもう一人子どもをつくるとしたら、無理だとはわかっているけど、1

シンポジウム「研究者になる！」

歳になるまで育児休暇がほしいという思いもお聞かせくださいました。

最後に田邊玲子・京都大学人間・環境学研究科教授より「独自性を求めて」の講演がありました。先生の専門はドイツ文学です。迷いながら研究者の道に進まれたそうで、修士課程への入試も博士課程への入試も1年目は不合格、いろいろ悩んだ末、2度目の挑戦で合格だったそうです。

大学院は自由に学問について語り合う、熱い理想的な交流の場と想像していたそうですが、修士課程に入った時に、大きく違っていると感じたそうです。先輩に「ゼミで質問をしたのは君が初めて」だと教えられたり、女子院生が少ない中なので、「本気で研究を続ける気があるか」とか「結婚すれば就職できませんよ」「結婚していないと就職できませんよ」など支離滅裂なことを言われたそうです。今なら、みんな心配して言ってくれたと思えるけれども、当時は嫌がらせをされている、大学では女であることは不利で、学問内容との葛藤を引き起こすと感じたそうです。

うつうつとしているときに女性学に出会い、さまざまな領域の若い女性の研究者や研究者の卵が集まって、女をテーマにして研究発表し、議論し、愚痴を言い合ったそうです。女性独文研究者の会（ゲルマニスティネンの会）では、多くのことを学び、大切な友も得て、同じ思いを共有する人たちのネットワークがあったことで救われたとおっしゃいます。

研究者は、自分の限界を知った上でそれを超える努力をしないといけないとおっしゃいます。それは大変なことです。研究には苦労も快楽もあるが、ガス抜きは精神衛生上必要、あくまでも明るく、愚痴は気心の知れた仲間とどんどん言い合うこと、先生の悪口を言ってもいいのですよ、とメッセージをいただきました。

（女性研究者支援センター支援室）

ホームカミングデー シンポジウム「私の生き方」

パネラー
㈱ｻｷｺｰﾎﾟﾚｰｼｮﾝ代表取締役社長　秋山咲恵（法学部卒）
小松法律特許事務所・弁護士　辻 淳子（理学部卒）
京都大学総合博物館・教授　岩崎奈緒子（文学部卒）
ぽむ企画・共同代表　たかぎみ江（工学部卒）
京都大学 iCeMS 特定研究員・歌人　永田 紅（農学部卒）
コーディネーター
京都大学女性研究者支援センター長　稲葉カヨ

京都大学は第4回同窓会ホームカミングデーの催しの中で、女子の学生・院生を対象にしたシンポジウム「私の生き方」を開催しました。自分たちの先輩が何を考えて今の道に進まれたか、その過程でのターニングポイントはどこにあったかをキーワードに5人の卒業生をパネラーにお願いしてお話を伺いました。女性研究者支援センターはこの企画に協力という形で広報の一端を担ってきましたので、ここに簡単に講演内容を紹介します。

秋山咲恵さん

“ドイツでの展示会を昨日終え、朝日本に帰ってきたばかりです。”という社長業のお忙しさを感じさせる切り出しで講演は始まりました。実際、現在のお仕事は技術者であるご主人と二人で立ち上げられた先端技術を使ったロボット製造業会社の社長さんです。

最初は、“文学が好きだし、女の子だから文学部でしょ”と思って入学されたそうですが、この動機に後ろめたさを感じたことと、卒業したら社会に役立つ仕事に挑戦したいと思うようになり、1983年に文学部3回生から法学部2回生に転入したのが、最初のターニングポイントだそうです。卒業後、外資系のコンサルティング会社アクセンチュアで4年間身も心も仕事に打ち込むながら、次にやってきたターニングポイントが、1987年の大学の先輩との結婚だそうです。

“一般に仕事に就いて4年目が自分を振り返る山があるそうですが、この頃から、このままでいいのだろうかを考えはじめ、企業の技術者である夫の仕事ぶりに憧れるとともに、その仕事のアウトプットがすべて社会に出るわけではないということに問題意識を持って、1994年に夫の技術を利用した新製品の開発をして製造業の会社を立ち上げました。”が、3番目のターニングポイント。転部を決心したときの、“自分の可能性を信じてできる限り挑戦してみたい”が、常に原点となって、いろんな人生の時点で挑戦してきたと語られる秋山さんは、“この不況にもめげず悪戦苦闘しながらも戦っていく”と話を締めくくられました。

辻　淳子さん

辻さんは、理学部卒の弁護士さんです。最初は、企業の研究所に勤められたのですが、5年後に結婚で退職、しばらくして、研究所に助手として採用され、分子レベルの研究、と同時に子育てを経験、両立の難しさに悩んだと述べられていました。しかし、3年後に研究チームの解散が突然決まり、他分野からの参入を奨励していた法曹界に3年間の期限付きでチャレンジすることを決心、無事に司法試験に合格されたそうです。これが1996年で、辻さんのターニングポイント。

法曹界を選んだ理由は、一つは社会との関わりを持ちたい、もう一つは、司法の分野なら家庭との両立も可能と考えた、ことにあると述べられました。最初は、弁護士としてのオールラウンドの仕事は無理だと考え、特許

保育園入園待機乳児保育室

9月に開室した保育園入園を待機中の乳児のための保育室では、現在4人の乳児が生活をしています。たっぷりの睡眠と月齢にあった運動で、元気に過ごしていて、暖かい日には、保育士さんに抱っこをしてもらって、日光浴を楽しんでいます。

保育室の隣にある支援室にも、「うれしい」とか「おなかがすいた」とうメッセージを乗せた大きな泣き声が聞こえてきます。時折出あうセンター職員にも、とても素敵な笑顔を返してくれます。

＜保育園入園待機乳児保育室＞
開室時間：9時から18時（月から金曜日、延長保育有）
利用資格：京都大学に所属する女子学生・女性研究者
利用対象：生後9週目～年度末で15ヶ月未満の乳児
くわしくは、ホームページをご覧ください。

平成２１年11月14日　10：00から12：00、附属図書館ライブラリーホールにて

の分野の仕事なら両立も可能かと思って法律事務所に勤務。しかし、ご主人の、会社からの長期海外出張に合わせて、米国のロースクールに留学され、マイペースで仕事を進めてこられていました。昨年の10月からは仕事の幅を広げ倒産事件なども多く扱っている事務所に移り、ますます活躍されておられます。

岩崎奈緒子さん

岩崎先生には、ニュースレターたちばな13号に「研究者になる！」を書いて頂きましたので、センターホームページにあるそれを是非読んで頂くことにして、そこには書かれなかった、京都大学に入学される前のことについて話されました。高校時代は、大きな会社に入り、いい相手を見つけて、寿退社をして専業主婦になることを志しておられそうです。しかし、1982年の短大での英会話の授業で、伊藤野枝をテーマに報告したとき、女性のライフコースが一つではないことを知ったときが、最初のターニングポイントとなったといわれます。会社に入社4年後に退社。1年間の予備校生活を経て、1987年、京都大学文学部に入学したが二つ目のターニングポイント。最後は1993年修士論文を提出して、日本史の研究者を志した時だそうです。会社を退職して、自分をぎりぎりの状況に置いたことが、今の自分を実現できたのだろうと述べておられました。

たかぎみ江さん

“「失敗談の方が役に立つかな」と思って引き受けました”というセリフから始められましたが、とてもユニークな生き方です。サイエンスとお絵かきが好きで、1993年建築学科に入学（最初のターニングポイント）、大学院で日本建築史を専攻。その間、友達の平塚桂さんと一緒に、一般の人にも面白がってもらえるwebによるサイト「ぽむ企画」を立ち上げる（2回目のターニングポイント）。これが、意外と反響があって執筆の依頼があり、今は「建築ライター」と名乗る。（2001年3回目のターニングポイント）。4回目のターニングポイントは、単著「京の近代建築」（らくたび文庫）上梓を志した時ですと述べておられました。“私が紆余曲折を経てこの仕事を続けているのは、相棒と時流に恵まれたことと、「ものをつくる」ことに敬意を持っているからだと思います。”と締めくくられていました。

永田　紅さん

永田さんは、高校の時に文系から理系に転向された方（最初のターニングポイント）ですが、ご両親が歌人なので自然と五七五七七には馴染んで、今も、iCeMSの研究員として善玉コレステロールの研究をすると同時に歌人としても活躍しておられます。“みなさんは、歌を作るときはきれいな景色をながめたりしてのんびりと作ると思っておられるでしょうが、そうではありません。徹夜して歌を作ることもありますし、締め切りに追われて作ることもあります。”といわれるのを聞いて、論文書くのと同じではないかと思いました。“女性にとって20代後半は、大学院進学や仕事、結婚に悩み、ポスドクになっても将来の不安定さに悩みます。そんなとき「疲れたら休め。彼らもそう遠くへは行くまい」というロシアの小説家の言葉をお守りのように唱えています。”と、現代の若手研究者の矛盾をすべて抱え込んだような発言でしたが、“歌を作ることが自分を引っ張ってくれている気がします。”とさわやかに述べておられました。永田さんの次のターニングポイントは、1997年歌壇章受章、1999年～2000年月刊の短歌雑誌に連載、2000年始めて論文が受理、2001年第一歌集『日輪』により現代歌人協会賞受賞、と連続しており、研究員と歌人の両輪で走っておられます。

（文責　女性研究者支援センター　登谷美穂子）

連載：研究者になる！－第21回－

「研究を続ける」
基礎物理学研究所・准教授
延與佳子

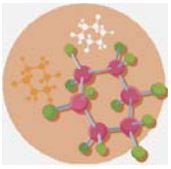
京都大学理学部出身で専門は原子核理論。東京の研究所に就職後、茨城県に転勤し、４年ほど前に縁があって京都に戻ってきた。「研究者」というと、一生の仕事として“研究”を選んだ人を指すような気がするが、そういう意味では自分がいつ「研究者」になったのかあまり自覚していない。ずっと研究を続けるのか（研究が続けられるのか）が明確なわけでなく、日々の生活の中でどうにか研究を続けることができたという印象である。気が付くと大学院に進学してからの２０年研究をしていたことになり、結果として「研究者」みたいなものになっていた。そういう意味で、今回いただいた「研究者になる！」というお題に対しては、私が研究を続けるきっかけなどをお話するのが適当であろう。

大学時代は京都大学理学部で物理を専攻した。学部全体３００人中で女子は１０人、物理に進んだのは２，３人だったと思う。大学院に入ってからは、研究室の先輩に１０年前女性が一人いたとかいう程度である。他の研究室の先輩や後輩まで見渡せば女性の大学院生が見つかるが、身近には女性の院生はいなかった。これだけ少ないと自分で女性を意識することはあまりなかったから、もちろん、勉学や研究においても女性だから損だとか得だとかいうことを感じずに過ごしていた。大学院に進学したのは、大学であまり勉強しなかったし、もう少し勉強して専門のことを知りたいという軟弱な理由だったような気がする。そんな理由だから、とりあえず修士課程までやってみて、それからは後で考えようと思っていた。バブル絶頂期の売り手市場で就職に困らない時代だったのも、進学に不安がなかった理由だと思う。

ところで、子供の頃からぼんやり考えていた自分の人生には「お嫁さんになる」という人並みの夢があった。いつか人生のパートナーが現れて自分は主婦になり幸せな結婚生活を送るという考えは当時珍しくはない。前述の「女性を意識することが少ない」とはビジネスの世界においてであって、自分のプライベートでは幸せな人生を想像していたのである。大学院に入った頃も、いつか自分は“研究”より“結婚”を選ぶのだろうと思っていた。ところが、修士のときに専門の研究に嵌ってしまった。まるで面白いゲームに夢中になるように病みつきになり、生活の中で“研究”のウェイトが大きくなった。これが、研究を続ける最初のきっかけとなるが、ここで「幸せな結婚生活」と「研究を続ける」の選択が両立できるのかは一つの問題である。

その頃、結婚・出産という人生の転機が訪れる。隣の研究室の助手であった配偶者は当初「君は研究を続けたらいい。育児は自分がする」と言っていたので、上記の選択が両立できると思っていたら世の中そんな甘い話はない。出産後、彼の意見は①「家事・育児は収入の反比例で負担すべき」、②「１０年間ポスドクを続けて芽が出なかったら研究を止めて専業主婦になること」に変わっていた。さらに、私の場合、結婚生活は幸せでなかったので、②の選択は人生の終わりであった。つまり、私に残された選択肢は「研究を続ける」以外なく、そのために何としても成果をあげて研究職に就かなくてはならないという差し迫った状況に追い込まれた。これが研究を続ける二つめのきっかけである。自分の人生がかかっているから、それまでぼんやり研究をしていたのとは必死度がまるで違う。幸い、博士卒後１年で東京の研究所に就職し、子供二人を連れて別居生活を始めることができた。

その後、子供が小さいうちは毎日ぎりぎりの生活が続いたが、ふりかえればあっという間に一番上の子が１５歳になった。今まで研究を続けることができてよかったという思いと周りの方々への感謝の気持ちがわいてくる。研究で頑張る上では、特に職場でのメンタルな支えの意義は大きい。原子核という研究分野では、女性の活躍を応援するような雰囲気を感じることが多い。サポートといっても、積極的に励ますことから、暖かく見守るなど、スタンスは様々であるが、自分の頑張りを応援してくれる人が何処かにいるというのは何よりも励みになる。私の研究人生はまだ２０年。研究者としてこれから学ぶことも多いと思うが「甘えすぎず、頑張りすぎず」自然体で息の長い研究者になりたいと思っている。



女性のための相談室　開室日

12月4日、11日、18日、25日　　1月8日、15日、22日、29日　　2月5日、12日、19日、26日

Center for Women Researchers

〒606-8303　京都市左京区吉田橘町
電話　075（753）2437
FAX　075（753）2436
E-mail　w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP　http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/